

三井のリフォーム住生活研究所長 西田 恭子

せつかくリフォームしたのに……

地方に行った折、知人宅に立ち寄った。築二六年の自宅をリフォームしたばかりの彼女は、久しぶりの訪問者をうれしそうに迎えてくれた。キッチン、お風呂、洗面、トイレと設備を交換し、費用も五〇〇万円程かけていた。きっかけは給湯器が壊れたこと。「どうせ職人さんが入るならこの際、キッチンを交換したらいいかしら？」とリフォームに踏み切った。



おしゃれなシステムキッチンがセットされていたが、私の知人の中では最もこまめに働く彼女が、食器洗い乾燥機を入れていることが不思議だった。働く女性や子育て期の人の中には、一日たりとも欠かさず使用している人もいるという食器洗い乾燥機だが、彼女の場合はまったく使っていない様子がない。「後からでは入れられないと言われたから、どうしようかなと思っただけで入れたの」というのを聞き「えっ！」と言葉を呑んだ。専用配線さえ事前に考慮しておけばそんなことはないのではと思っただけ、口には出さなかった。キッチンだけだと思っ

いたのが、「足が伸ばせるユニットバスがいい」と夫が言い出し交換。洗面もトイレも……とだんだん膨らんだリフォーム工事のようだ。どれも立派な設備を導入しているが、食器洗い乾燥機や勝手に水が流れるトイレより、クロスの張替えと塗装を入れた方が効果的だったのではと余計な思いが頭をよぎった。老朽化した設備交換としては成功している、リフォーム時に暮らしづくりの視点がなかったのは残念な気がする。

特に、終の住処への投資のほすが、夫の両親が亡くなり、もしかしたら田舎に帰ることになるかもしれない。旧家の長男に嫁いだことを身近に感じグレイな気持ちになっていくが、現実問題はその時この家をどうするかだ。終の住処は突然中古住宅物件となり、高級設備の装備よりも、家としての総合的なグレード感が問われることになる。

家のリフォームは暮らしぶりであり、ライフサイクルの中での位置づけをしつかりする必要がある。特にリフォームの提案者は、それを理解したうえで設計を行うべきである。次回また彼女と会うときには、この家ではないかもしれないなど思いながら、親の問題と家の問題はいろいろな形で関わってくることを、そしてリフォームプランナーの役割と価値を再認識した。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。